

葉集を読む

松岡 隆子

今年の桜は平年よりかなり早く、東京では三月半ばに開花し二十日過ぎには満開となった。コロナ禍のなか今年も個々に花見を楽しむこととなったが、一人静かに花を愛でるのもそれなりに趣があつてよいものだ。桜に向き合い自分に向き合うなかで俳句の世界に浸ることができ。さて、葉集では今年の桜はどのように詠まれているのか見てみたい。

花の寺静かに人の増えをりぬ

醍醐喜美枝

例年花見の人々で賑わうお寺も、今年は静かである。それなりに人出はあるが、誰もみなマスクをかけ、時おり小声で話しながら満開の桜を仰いでいる。作者はその異例な花見の光景を「静かに人の増えをりぬ」と書き留めた。コロナ禍の時代の一つの証言と言えよう。

蜘蛛の囿の落花まみれとなりぬたる

小川テル子

落花まみれの蜘蛛の囿に目が留まるのも一人の花見ならではのであろう。一人静かに歩いてると今までは見過ごしてい

たものが見えてくる。新しい発見は新鮮な句を生む。一人もまた良きかなである。

歓声のやがて鎮もる花万朶

二木 公子

〈咲き満ちてこぼる、花もなかりけり 虚子〉——こんな桜に出合ったら誰も思わず声を上げるだろう。辺りの静けさに気づいて慌てて声を慎む。自由に花見の宴を楽しむことの出来たあの日常は何処へ行ってしまったのだろうか。万朶の桜が淋し気だ。

桜見て山見て母の忌を過ごす

堀 真智子

母の忌日、ほんやりと桜を見て過ごす。あちこちの桜の名所を巡った旅の日々を思い出しながら、しみじみと母を偲ぶ。桜の向うの遠い山々に過ぎ去った日々への思いが募る。〈桜見て〉だけだと平板であるが、〈山見て〉と畳みかけるように言ったことで深みのある句になった。

独り来て独りで帰る花見かな

河上 秀子

淋しいのは分かっているが独りで花見に出かけた。当然行きも帰りも独りである。つくづく独りであることを実感しながらも、亡き人と共に花見を楽しんだ日々を思いを馳せている。淡々と詠んでいて切ない。

花吹雪思案の末の外出なる

眞保 勝江